

氏名	山 本 薫
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第3796号
学位授与年月日	平成12年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学 位 論 文 名	創造力の変貌 ーコンラッド作品の内容と形式に見る「裏切り」ー
論文審査委員	主 査 教 授 荒木 映子 副主査 教 授 芝原 宏治 副主査 教 授 広瀬 千一

### 論 文 内 容 の 要 旨

ジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) の創作活動期間は、通常『運命』(*Chance*) (1913) を境に大きく前期と後期に分けて考えられ、後期作品群においてはコンラッドの想像力が衰退していくとされてきた。仲間に対する「裏切り」とその道徳的判断の問題を追いつけた前期作品が厳しい倫理観に支えられていたのに対して、後期作品には前期作品の持つ緊張や真摯な葛藤が見られないということが、想像力衰退説の根拠である。極限状況で犯された「裏切り」に道徳的判断を下して意味付けしようとする際の苦しみが生み出ている前期作品と比較すると、後期作品における道徳的な問題はやや安易に片づけられていることは確かである。しかし、後期作品において、共同体との関係を断って隠遁生活を送る主人公の物語が描かれているからといって、想像力衰退を言うことはできないのではないか。本論文は、「裏切り」のテーマとそれを物語る語りの手法に注目して、前期作品六篇を解説することにより、想像力変貌の問題を考察することを目的とする。

「裏切り」の問題を問い続けたことは、多分に彼自身の経歴と関係が深いと思われるが、作品の中でそれは個性的な語り手によって語られ、屈折した形で提示されることになる。語り手は、同じ共同体の仲間に対してなされた「裏切り」に、道徳的な決着をつけようとして語る。が、語り手は、視点を自らの属する共同体の内と外を行き来させるため、二つの判断の間で板挟みになった状態で語ることになり、「裏切り者」である主人公について容易に結論を下すことができない。つまり、彼の物語は、自らの共同体の内側に立って見た世界と、外側から見た世界の二重構造をなすことになる。

従来、「裏切り」という物語内容にばかりコンラッド批評の議論が集中し、形式における上述の特徴はあまりかえりみられなかった。着目されるにしても、語りの視点に一貫性が欠如しているとか、構造に亀裂が生じているとか、作品の欠陥と結び付けられることが多かった。しかし、コンラッドが「裏切り」を取り上げる際に、繰り返し、二重構造で作品世界を構築しながら、その構築の仕方を変化させていったのは、「裏切り」のテーマを効果的に表現するためにコンラッドが選んだ独特の技法であると考えられる。序章で、このような本論文の趣旨を述べた後、以下の各章では、「裏切り」を扱った前期の作品から六つを選び、『闇の奥』(*Heart of Darkness*) (1899) から、想像力の衰退が始まると言われる「秘密の共有者」('The Secret Sharer') (1912) までの作品において、コンラッドが「裏切り」を物語るその手法を分析し、二重構造による作品世界の構築の発展と想像力の変貌を考察する。

第一章では、『闇の奥』において、語り手マーロウの語る物語が、コンゴの密林の「裏切り者」クルツを

発見する物語から、マーロウ自身の心の闇に潜む「裏切り者」発見へと内面化していくことを論じる。この変化は＜公＞のドラマから＜私＞へのドラマへの変化ととらえられ、これは単に作者の構想変異によるものではなく、作者の問題意識が何重ものヴェールに包まれて語られたものであることを明らかにする。

第二章では、『ロード・ジム』において、全知全能の語り手が途中でマーロウという個人的な語り手に交替することによって、小説構造上＜公＞と＜私＞の分裂が起こり、しかも、それが語り手マーロウの精神に葛藤として取り込まれて、分裂が解消されないまま、「裏切り者」ジムへの道徳的審判が先送りにされることを論じている。

第一、第二章で扱った作品においては、＜公＞と＜私＞の分裂を作品構造内の欠陥という形で生じさせていたが、第三、四、五章で取り上げる政治小説群においては、＜公＞と＜私＞の二重構造によって「裏切り者」の意味が強められているということを検討する。

第三章では、コンラッド一番の大作とされる錯綜した筋を持ち難解な『ノストロモ』を取り上げる。この作品においては、西洋文明と土着の民との闘争という広大な＜公＞の舞台に主人公の「裏切り」が置かれた結果、「裏切り」のテーマが見極めがなくなっているが、これは「裏切り」が演じられる広い舞台に焦点を合わせるための作者の審美的意図であると論じる。また、＜公＞と＜私＞の二重構造は、「裏切り」に対する道徳的判断の問題を複雑に提示するのに役立っているということを検討する。

第四章では、無能なスパイ、ヴァーロックに課されたグリニッジ天文台の爆破が偶然による失敗に終わるべく、物語が周到に用意され、「裏切り」が全く意味をなさないことが、＜公＞と＜私＞の二重構造によって強調されることを論じる。

第五章は、ロシア人青年がロシア語で書いた自らの「裏切り」についての日記を、イギリス人が英語に翻訳して＜公＞にするという形式の『西欧の眼のしたに』において、「裏切り」のテーマが二重の言葉の壁の向こうに押しやられていることを論じる。＜公＞と＜私＞の対比構造が、「裏切り」とそれに対する裁きの不条理さをきわだたせるための仕組みであることを明らかにする。

第六章では、「裏切り」か「忠誠」かの道徳的判断が下せない状況を描いた「秘密の共有者」という作品を分析する。「裏切り」／「忠誠」、＜公＞／＜私＞の区別立てが無効になった世界を描いたことは、コンラッド自身がオブセッションから脱却したことを意味すると解釈し、後期のコンラッドへの変貌を示すものであることを論じる。

結論では、変貌後のコンラッドの作品が、真にモダニストとしての新しい技法に着手していくことを論じ、想像力衰退説を否定する。

以上のように、前期作品を語りの二重構造に注目して読みなおすことにより、構造上の分裂からその無効化への推移が、コンラッド自身の帰属意識と技法の開拓に深くかかわるものであることを明らかにする。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、国籍離脱という経歴から自分自身の帰属と「裏切り」の問題にこだわり続けたコンラッドが、多くの作品において「裏切り」とそれに対する道徳的判断をテーマとして取り上げ、そのテーマを語る際に使った技法の変化を論じたものである。

ジョウゼフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) は、ロシア支配下のポーランドに生まれ、独立運動の指導者であった父とともにロシア流刑になり、後船乗りになって世界各地を航行し、最終的にイギリス籍を取得して、40歳になってから英語で小説を書き始めた作家である。彼はヴィクトリア朝のリアリズムの手法を基本に、海洋やアフリカの奥地、南米の架空の国等を描いたが、ヴィクトリア朝の作家と決

定的に異なるのは、彼が、極限状態に投げ出された人間の道徳的な葛藤と決断のテーマを追求し、西欧の植民地主義を批判する視点を持っていたことである。伝統的な小説における全知全能の語り手が立脚する「事実」や「出来事」を相対化し、「記憶」や「意識」に沈潜する語りの手法を自覚的に選んだコンラッドは、むしろ先駆的モダニストとしてとらえられることが多い。

従来、内容面から、コンラッド作品を倫理的に議論したり、伝記的・歴史的事実との照応関係を立証しようとする研究はよく行われてきた。また、「裏切り」のテーマを語る際に、語り手の視点が分裂したり、動揺したりすることを作品構造上の欠陥であると見なし、作者の審美的意図の失敗であると指摘する批評家が多かった。このような批評に対抗して、本論文は、コンラッドが創作活動の前期に書いた六つの作品の語りの構造を分析し、語り手が分裂した視点から自己を見つめながら物語る語りの手法を次第に独自の創作の技法として確立していった過程を論証する。そして、この技法を乗り越えた後期の作品においては、「裏切り」のテーマを離脱し、新たなテーマと技法の探求に向かっていくことを論じて、コンラッドの想像力衰退説に異を唱える。これが論文のタイトルの意味である。

論文は、まず、序章で簡潔に、コンラッドの想像力が「裏切り」への囚われから解放へと向かうことを検証するものであることを述べている。このプロセスの中に語りの視点や構造上の分裂を置いてみると、従来欠陥として見なされてきた分裂が、英国人作家ではないコンラッドが独自の技法を開拓する試みの一環であったという論者の主張が首肯できる。分裂をこのように再評価したことは、論者の創見である。以下、書かれた年代順に各章一つの作品があてられ、いずれも「裏切り」のテーマがどう描かれたかを論じ、全体として、その描き方の変化を精密な読みを通してたどる構成となっている。

第一章では『闇の奥』を、第二章では『ロード・ジム』を取り上げ、それぞれ、「裏切り者」の発見と、「裏切り者」に対する道徳的判断が扱われていることを論じる。いずれにおいても、「裏切り」行為を仲間にく公にしようとする物語から、語り手自身のく私的な内省のドラマに移行し、作品内にく公とく私との分裂を生むことを検証する。く公とく私との二重構造を前期作品解明の切り口として巧みに利用し、成功をおさめている。

第三、四章ではそれぞれ、『ノストロモ』『密偵』を取り上げ、く公とく私との二重構造を用いることによって、前者においては「裏切り」の意味を複雑化し、後者においてはそれを空洞化する効果をあげていることを検証する。第五章では『西欧の眼の下に』を取り上げ、「裏切り」を道徳的に裁くという行為自体の不条理を言うために、く公（西欧）とく私（ロシア）の二重構造が用いられていることを、第六章では、「秘密の共有者」において、「裏切り」を裁くための道徳的判断の基準そのものが無効にされていることを論じる。第三章は、「裏切り」を成立させる状況の方に作者の関心が向いた作品として『ノストロモ』をとらえ、西欧と非西欧がせめぎあう壮大な物語を織り上げた手法をよく解明している。第四章では、『密偵』においては、無意味な「裏切り」の事件について意味が不在のまま語り手が饒舌に言葉を積み重ねていくことが指摘され、これは正鵠を射ていると思われる。第五章で取り上げられる『西欧の眼の下に』については、メタフィクショナルな面白さを的確にとらえているが、「裏切り」のテーマが二重の言葉の彼方に押しやられているといった記述には、幾分レトリックに頼るきらいが見られる。第六章の「秘密の共有者」がコンラッドの想像力変貌の分岐点となることは、先行する五つの作品との関連の中では十分納得できるが、結論において述べられているように、変貌後のコンラッドが真にモダニストとしての新しい技法に着手したと断定するには、後期の作品についても同じくらい精緻な分析を行わない限り、抽象的議論に終わってしまうであろう。さらに後期作品についても、従来の解釈への再考をせまるべく、踏み込んだ考察を期待したい。モダニストの定義についてももう少し説明がほしい。

以上のように、物語内容と語りの行為ないしは構造が表裏一体であることを考慮し、「裏切り」という一貫した観点から前期作品の技法を解明しようとしたこと、前期作品を通して丹念に読む作業によって、単独の作品の分析では見えなかった作者の技巧を肯定的なものとして浮かび上がらせたことは高く評価できる。また、同時代のイギリスの作家と比較しながら、西欧の帝国主義の文脈の中でコンラッド文学の独自性を把握しようとしていることは、単に技法の解明にとどまらぬ論者の視野の広さを示している。難解な作品をよく読みこなしていることは筆者の英語力を証明しているし、コンラッド批評史をおさえた上で自分の見解を主張していることから、これまでの秀でた読書量と研究の奥行きがうかがえる。また、論述の仕方には勢いがあり、鋭敏な考察も散見でき、研究者としての将来を大いに期待させる。

若干強引な議論や、言葉の曖昧な使用が見られるが、これらは、本論文の以上の長所によって十分補われるものである。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。